

博多46

——博多遺跡群第74次発掘調査概報——

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第395集



1995

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はアジアの拠点都市を目指し、国際都市づくりを進めています。福岡市の都心部にねむる博多遺跡群は、国際都市「福岡」の原点とも言える遺跡で、平安時代以来中世を通じて中国・朝鮮を主とした東アジアとの交易・往来で栄えた地にあたります。

今回報告する第74次調査地点は、我国最初の禅宗寺院として知られる聖福寺に近く、中世にはその寺内町に含まれていたと考えられます。本調査で検出されました中世の道路遺構と建物跡は、聖福寺寺内町の形成を知る上で、貴重な資料と言えます。

本書が市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理・報告まで、様々な御協力を賜わりましたフジシン住宅産業株式会社をはじめとする多くの方々に、心から謝意を表します。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例言・凡例

1. 本書は、共同住宅建設に先立ち福岡市教育委員会が発掘調査を実施した、福岡市博多区上美原町131-2 博多遺跡群第74次調査の概要報告書である。
2. 本書の執筆・編集は、大庭康時が行った。
3. 本書に使用した遺構実測図は大庭及び大庭智子が、遺物実測図は上塘貴代子・森本朝子・大庭が、出土銅鏡の説明・判読・集計・拓本は大庭智子が作成した。整図には、井上涼子・上塘・大庭があたった。なお、遺構実測図中で用いた方位は、磁北である。
4. 本書に使用した遺構・遺物写真は大庭が撮影し、萩尾朱美が焼付けした。
5. 本文中の遺構番号は、全て発掘調査時の通し番号をそのまま用いた。
6. 本書に掲載した遺物は、遺構単位に通し番号とした。
7. 本調査に因る遺物・記録類の整理には、生垣綾子・井上・今井民代・上塘・萩尾・古谷宏子・保利みや子・森寿恵があたった。
8. 本調査にかかるすべての遺物・記録類は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・管理・公開される予定である。

本文目次

第一章　はじめに	1
1. 発掘調査にいたるまで…1	2
2. 発掘調査の組織と構成…1	3
3. 遺跡の立地と歴史的環境…3	2
第二章　発掘調査の記録	3
1. 発掘調査の経過…3	3
2. 調査地点の層序…3	3
3. 調査の方法…4	4
4. 遺構と遺物 (1) 第1面…5 (2) 第2面…6 (3) 第3面…11 (4) 第4面…18 (5) 第5面…26 (6) その他の遺物…31	18
第三章　まとめ	33

第一章 はじめに

1. 発掘調査にいたるまで

1991年1月29日、フジシン住宅産業株式会社より、福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、福岡市博多区上呉服町131-2に関する埋蔵文化財事前調査願が提出された。

申請地は、福岡市教育委員会が周知している博多遺跡群の範囲に含まれる。博多遺跡群は、JR博多駅から博多港にいたる間の都心部にある。現在では、主要な街路沿いにビルが林立する一方で、老朽化してきたビルの建て替え・高層化、これまで開発からまぬがれてきた裏通りの再開発が、急速に進みつつある。博多遺跡群における、80次を超える発掘調査は、すべてこのような都市の再開発に伴うもので、開発及び発掘調査件数の増加に反比例して、古い博多の町の面影は姿を消しているのである。申請地も、御供所通りと呼ばれる小路に面し、江戸時代からの町割り、屋敷割りをよく残した一角に位置していた。そのことは、同時に江戸時代以前の遺構の良好な遺存を示してもいた。

そこで、埋蔵文化財事前調査願を受理した埋蔵文化財課では、1991年2月19日に試掘調査を行い、予想通り良好な状態で遺構が残っていることを確認したのである。この結果をうけて、埋蔵文化財課では、申請地の全面について発掘調査が必要であると判断し、フジシン住宅産業株式会社との協議にはいった。その結果、開発面積270.96m²の内、建築物によって破壊される140m²について、発掘調査を実施することで同意、受託契約を結んだ。

発掘調査は、フジシン住宅産業株式会社、株式会社原田組による矢板H鋼打ち込み、表土すき取り(現地表下1.3m)後に着手することとし、1991年9月17日発掘器材を搬入、翌18日より調査を開始した。

2. 発掘調査の組織と構成

調査委託	フジシン住宅産業株式会社		
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	井口雄哉
調査総括	同	埋蔵文化財課課長	折尾 学
	同	第2係長	塩屋勝利
調査庶務	同	第1係	吉田麻由美
調査担当	同	第2係	大庭康時
調査作業	松尾玲子(九州大学学生、現鳥栖市教育委員会)	内山和子	江越初代
	奥田弘子	金澤春雄	大庭智子
	樋口義雄	金子國雄	樋藤利雄
	樋藤義之助	篠崎伝三郎	柴田博
	関加代子	関義種	曾根崎昭子
	津川真千代	合川キチエ	宮崎ヨシ子
	村上エミカ	村崎祐子	吉住シヅエ
	萬スミヨ	萩尾朱美	

その他、発掘調査に関する種々の条件整備、調査中の便宜については、フジシン住宅産業株式会社、株式会社原田組の御協力をいただいた。

遺跡調査番号	9126	遺跡略号	HKT-74
調査地地番	博多区上呉服町131-2	分布地図番号	千代・博多48
開発面積	270.96m ²	調査対象面積	140m ²
調査期間	1991年9月18日～10月31日	調査実施面積	140m ²

3. 遺跡の立地と歴史的環境

博多遺跡群は、博多湾岸の御笠川・那珂川河口部に形成された、三列の砂丘上に立地している。

歴史的には、弥生時代中期を遺構の初見とし、その後若干未検出の時期はあるものの、ほぼ継続して現在にいたる。これについては、博多遺跡群の他の報告書を参照されたい。

本調査地点は、砂丘IIとされる真中の砂丘の東北部に位置する。60m程東南には、栄西が宋より帰国して最初に開いたとされる安国山聖福寺がある。聖福寺には、若干の中世文書が伝わっている。その中の「安山信家藤」「聖福寺古図」は、16世紀中頃の聖福寺寺内町の様子を示す史料として、しばしば論じられてきた。(第三章 まとめ)。この両史料によれば、聖福寺寺内町は、塔頭と共に寺の西北方向に大きく展開していた様である。また、第35次、26次調査などから、聖福寺前面を通る道路が検出されており、それは本調査地点の西側を通る。これらの点から、本調査地点は、聖福寺寺内町の一辺に当る可能性が、非常に高いと言えよう。



Fig. 1. 博多遺跡群位置図(1/35,000)▲は調査地点

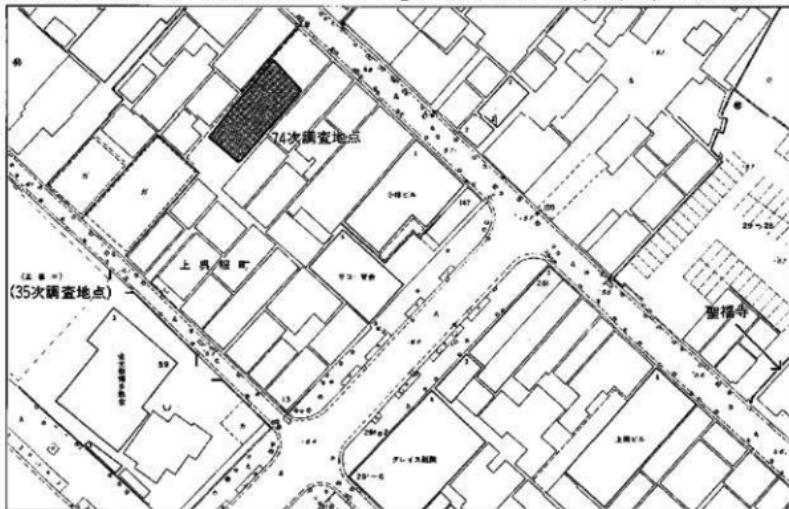


Fig. 2. 第74次調査地点位置図(1/1,000)

第二章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の経過

発掘調査には、株式会社原田組による表土すき取りの後をうけて、1991年9月17日より着手した。以後の簡単な経過を以下に記す。

9月17日	器材搬入
9月18日	調査開始。測量基準点・グリッド設定。第71次調査現場よりレベル移動。
9月18日～25日	I区第1面調査
9月26日～10月5日	I区第2面調査(9月27日、台風襲来)
10月7日～10月15日	I区第3面調査(10月8日～10日、大庭出張)
10月16日～10月19日	I区第4面調査
10月19日～10月21日	I区第5面調査
10月22日	II区第2面調査(II区では、第1面を設定しなかった)
10月23日～10月24日	II区第3面調査
10月25日～10月28日	II区第4面調査
10月28日～10月30日	II区第5面調査。調査作業終了。
10月31日	器材撤収

2. 調査地点の層序

第74次調査地点は、淡黄色砂層を基盤とする。これは、砂丘の上面にあたる。淡黄色砂層の直上を、暗褐色砂層が覆う。淡黄色砂層と粒径などは変わらないが、若干粘り気を持つ。暗褐色砂層には、土器片などが含まれる。後述する古代の竪穴住居址などは、暗褐色砂層の上面あるいは層中から掘り込まれたものと思われるが、その掘り込み面を確定することは困難で、結局淡黄色砂層面で検出せざるをえなかった。

これら砂層及び砂質土層の上には、暗褐色土を基調とした、細かく変る土層群が堆積している。古代末・中世初頭以降の、人为的な堆積土である。典型的な様相は、調査区南西壁面で見られる(Fig.3)。実際には、土層実測図に書き込み得ない程の薄い堆積を示す層があり、整地層として一定の厚さにま

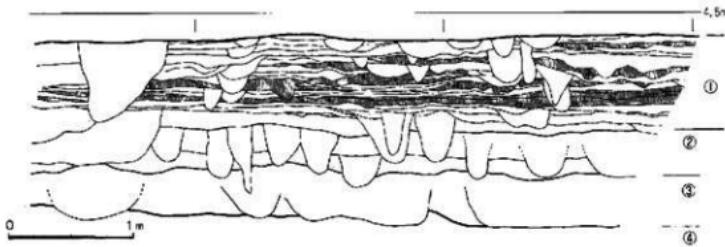


Fig. 3. 調査区南西壁土層実測図(1/40)

アミは、焼土層および焼土処理層、①は整地層、②は砂質土層、③は造構埋土、④は砂丘砂層

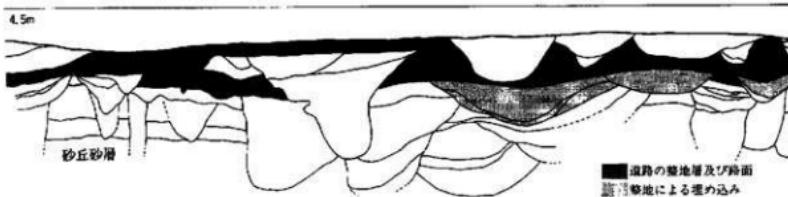


Fig.4. 道路造構土層断面(調査区南東壁)(1/60)

とめて把握している。この一定の幅の中では、造構の掘り込みではなく、一回の整地の単位と考えてよからう。

調査区南東壁では、壁面全体を通じて中世後半の道路断面がみられる(Fig. 4)。これも細かい単位の整地層として表れるが、上面が硬化した灰色粗砂層がくり返し見られ、路面の重層を示している。注目すべきことは、道路が大きく波打っている点である。路面がゆるく陥没している箇所では、その下位に土坑がみられる。したがって、平坦に均して道路を作ったものの、下に造構があった部分では、造構埋土が締っていない為に陥没をおこし、その結果凸凹の多い路面ができたと考えられる。

なお、本調査では、近世以後の堆積土は、既存建築物による擾乱が大きかった為、調査以前に除去している。すなわち、調査を実施した面から現地表面までの約1.6mが近世初頭から現代までの堆積を示している。

3. 調査の方法

発掘調査区は、幅約7m、奥行約21mの細長い長方形を呈しており、隣地との間に十分な空きもなかった。よって、道路側と奥側とにわけ、奥側(I区)から調査、その廃土を道路側の調査区内にためておいて撤出、I区調査終了後、廃土をI区に埋め戻す形で道路側(II区)の調査を行った。

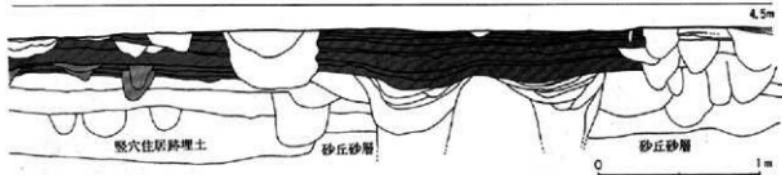
調査は、表土除去後の面を第1造構検出面(以下、第1面と略す)とし、以下調査区の壁面の上層を見ながら整地層を鍵層として掘り下げ、第2面、第3面を設定、砂層上面を第4面、さらに第4面で検出しきれなかった造構があったため、駄目押しをかけて第5面まで調査した。この掘り下げ中に出土した遺物については、それぞれ掘り下げ面となった造構検出面を取って、「1面下」・「2面下」…として取り上げた。

土層観察、土層実測図作成は、表土すき取り面以下、すなわち第1面以下について行なった。表土すき取りの深さについては、試掘調査時の所見によるものであり、本調査時にそれを再検討することは、行なっていない。

なお、II区については、第1面を設定しなかった。I区第1面調査時の所見と調査工程とを考え合せ、より成果が期待できる第2面以下に調査の主眼を置いた結果である。

4. 遺構と遺物

以下、各検出面ごとに造構・出土遺物について略述する。造構は、基本的に造構番号順に記すが、第4面については、中世の造構の後に古代の造構を、第5面では堅穴住居の次に土坑を報告する。造構番号は、I区第1面より検出した順に番号をつけた。よって、造構の種類にかかわらず通し番号になっている。以下の記述にあたっては、造構番号の後に、括弧で造構の種類を示した。



(1) 第1面

表土すき取り後の面である。標高は、4.7m前後にあたる。

柱穴、土坑、井戸などを検出した。16世紀代を示す遺物を出土する遺構も一部見られたが、ほとんどは江戸時代以後の遺構である。検出面の年代としては、江戸時代初めを考えるのが妥当だろう。

調査区南東の長辺にそって、灰色の粗砂が、やや乱れた状態で細長くみられた。第1面調査時は、検出面の基調である暗褐色土壤とは異なる点から、後世の搅乱であろうと考えた。ところが、第2面以下の調査で、丁度この部分から中世の道路遺構が検出され、これが中世道路の最上面付近にあたるものと考えられる。調査時には、搅乱と判断した為に、逆に掘りくぼめてしまい、明らかに誤りを犯してしまった。

なお、遺構の上からは地境が存在する様子はなく、単一の屋敷地であったと考えられよう。



Fig.5. 第1面全景(北東より)

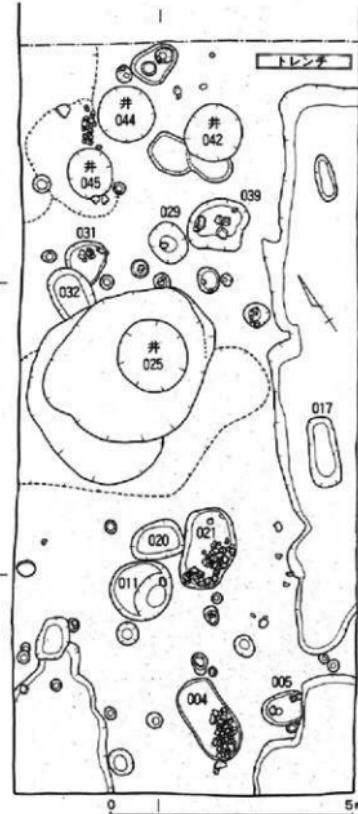


Fig.6. 第1面遺構平面図(1/100)

(2) 第2面

第1面から、50~60cm掘り下げた面で、標高4.2~4.3mにあたる。

柱穴・土坑・井戸・土壤墓・溝・道路造構などを検出した。

土壤墓は、朝鮮王朝粉粧沙器皿・同白磁皿・土師器皿を副葬したものである。(60号造構)。

75号造構(溝)は、道路造構の側溝にあたる。浅く狭いU字型の溝で、一部にうすく板の痕跡が残っていた。

道路造構は、調査区南西角から北東方角にのびる。調査区内では、道路幅を確定することはできなかった。

この他、掘立柱建物を復原することが可能だが、建物の規模を知りうるものはない。おそらく、道路に面して間口二間程の妻を向けた建物と、推測している。

第2面は、15~16世紀の造構検出面であろう。056号造構(=第3面118号造構、井戸) Fig. 9

井戸の井側部分である。掘り方は、第2面では確認できず、第3面の118号造構がそれにあたる。遺存状態は悪いが、最下部で木桶の木質を



Fig. 7. 第2面全景(北京より)(1)-1区(2)-2区

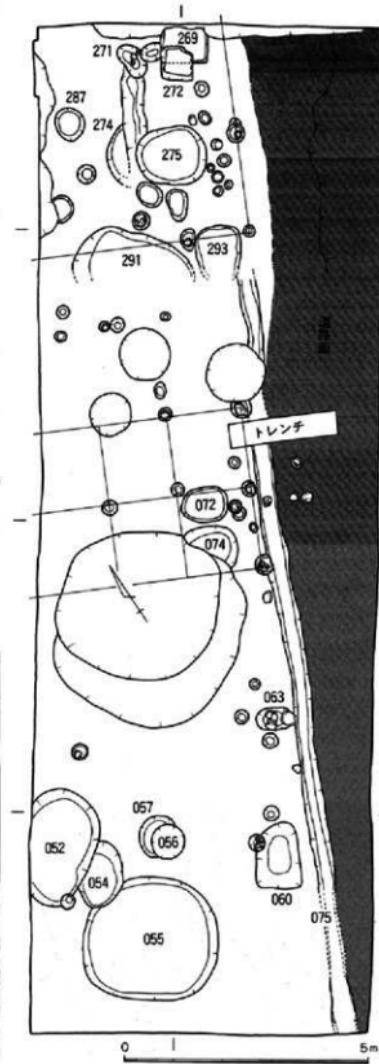


Fig. 8. 第2面造構平面図(1/100)

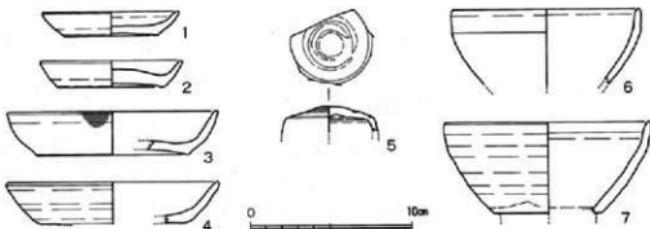


Fig. 9. 056号遺構遺物実測図(1/3)

確認した。掘り方は、径3.7mをはかる。15世紀頃の井戸か。

出土遺物を、Fig. 9に示した。1~4は、土師器の皿・壺である。外底部を回転糸切りし、内底をナデ調整する。口径・器高は、それぞれ8.5-1.5、8.8-1.6、13.1-2.6、13.2-2.6cmをはかる。3の口縁部には煤が付着する。5は、青白磁の蓋である。外面天井部に、同心円状の浅い凹線を施す。内面は、露胎となる。6・7は、黒褐釉陶器の天目碗である。胎土は、茶色をおびた灰色で、光沢の純い黒色の釉が施されている。この他、平瓦片が出土している。

060号遺構（土壤墓）Fig. 10~13

調査区の南端近く、道路側溝に接して検出した。長辺1.43cm短辺88cmの不整長方形で検出面からの深さは36cmをはかる。遺体の出土はないが、供獻と考えられる遺物から、土壤墓と判断した。以下に記す遺物から、16世紀代と考えられる。

出土遺物を、Fig. 12・13に示す。1~3は、埋土中に供獻されたものである。1は、土師器皿である。口径6.2~6.4cm、器高1.5cmをはかる。口縁部の対面する2ヶ所を、小さく打ち欠く。口縁部に煤痕が見られる。2は、朝鮮王朝粉粧沙器皿である。青灰色の釉に、白土を刷毛塗りする。見込みと高台疊付きには、それぞれ3ヶ所の目痕が残る。口縁部の対面す

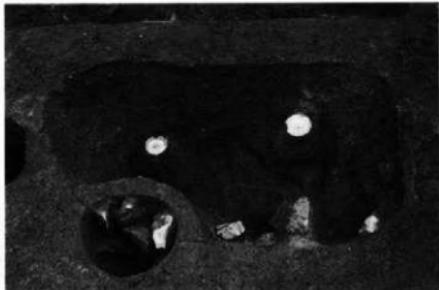


Fig. 10. 060号遺構(北西より)

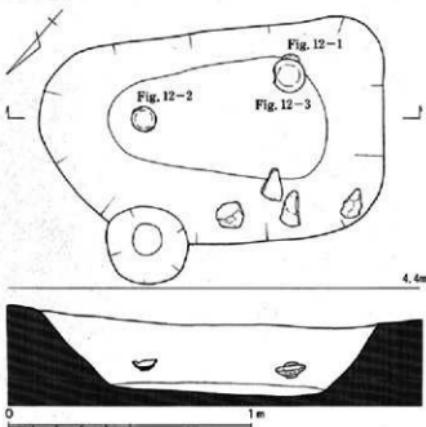


Fig. 11. 060号遺構実測図(1/20)

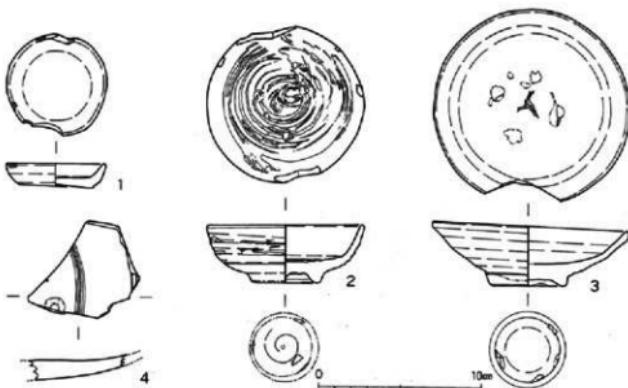


Fig. 12. 060号造構実測図(1/3)



Fig. 13. 060号造構出土遺物

る2ヶ所を打ち欠く。3は、朝鮮王朝白磁の皿である。くすんだ白色釉を施すが、光沢はない。見込み及び盤付内面に、目痕が付く。口縁の1ヶ所を打ち欠く。4は、ベトナム陶器（？）の白地鉄絵皿である。この他、瓦質土器の壊片などが出土している。

074号造構（土坑）Fig. 14～16

調査区中央付近で、第1面の井戸に切りられて検出された土坑である。土坑の一部を検出したにとどまるため、全体の形状は知りえないが、おそらくは不整円形の麻痺坑であろう。検出面からの深さは、25cmをはかる。15世紀頃の造構か。

出土遺物を、Fig. 16に示す。1～11は土器の皿・环である。全て、外底部を回転条切りする。10にのみ、内底のナデ調整と外底の板目圧痕がみられる。皿の法量は、1が口径7.8、器高1.3cm、2が同8.2、



Fig. 14. 074号造構 (北より)

1, 2cmをはかる。環は、身の立ち上りの浅いもの7・9と深いもの3~6・8・10・11にわかれれる。器高は、前者で2.3、2.5cm、後者で2.8~3.1cmである。さらに、10は11径14.4cm、11は13.6cmと、3~9に比べ、ひとまわり大きい。したがって、環は3形態に分けることが可能である。なお、11の内面には、全体に煤が付着している。12・13は、土師質土器の香炉である。同一個体と考えられる。全体に丁寧に研磨し、口縁部下には、円形の刺突文が並ぶ。体部下半を欠くが、おそらくは符腰になろう。14・15は、瓦質土器のこね鉢である。14は、口縁部片と底部片とにわかれ、接合できない。内面は構造の刷毛目、外面はあらい継の刷毛目で、体部下位は指頭で押える。外底には、削り痕が残る。15も同様の調整を示す。ともに内底は磨滅している。この他、中国陶器小片が若干出土している。

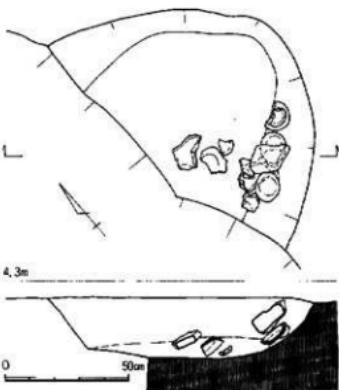


Fig. 15. 074号造構実測図(1/20)

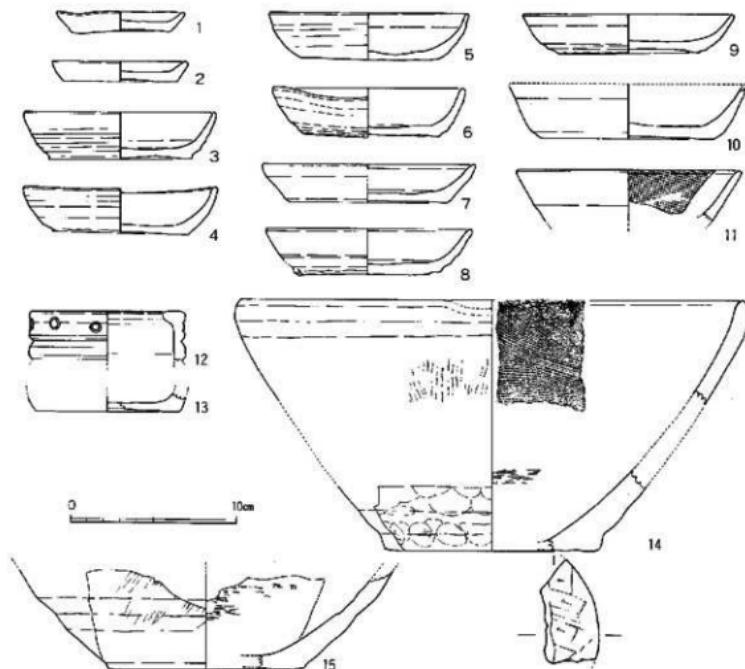


Fig. 16. 074号造構遺物実測図(1/3)

075号遺構（溝）Fig. 17・18

1区の南西角から北東に向ってのびる溝で、残念ながら2区では、この延長を検出しえなかった。幅35~40cm、深さ15~20cm、断面U字形の浅い溝で、一部分に薄く板の痕跡が確認できた。ただし、板をおさえる為の杭痕跡はなく、構造的に土留め板を立てたものではなく、基本的には素掘りであったと考えられる。次に述べる道路の側溝に当る。

出土遺物を、Fig. 18に示す。1・2は土師器の壺である。底部は回転糸切りで、1の内底にはナデ調整、外底には板目压痕がみられる。口径・器高は、それぞれ12.1~2.8cm、12.8~2.8cmをはかる。3・4は、白磁の皿である。4は口縁部を欠くが、おそらく3と同様に口ハゲであろう。5は土師質土器の鍋である。口縁部から内面は横ナデ調整、外面は縦方向の刷毛目調整する。外面には、煤が付着している。6・7は、瓦質土器のこね鉢である。この他、中国陶器片、青磁碗片（鍋蓮弁文）などが出士した。

道路遺構

075号遺構の南側では、灰色の粗砂質土による整地層がみられ、その上面は固くしまっていた。この粗砂は5頁でもふれた様に第1面から見られた。第1面および第2面において設けたトレンチの観察によると、粗砂と硬化面は細い単位で繰り返し見られ、その硬化面1枚1枚が路面を示すと判断された。

第2面における路面は、灰色粗砂質土の上面に、土器片、陶磁器片を敷き込んだもので、いわば舗装した路面である。路面は、ゆるく波打っており、平坦とは言えない。これについては、4頁で述べた様に、道路の下層にあった遺構による陥没のためである。

道路の方向は、075号遺構の方向によれば、N-28°-Eである。道路幅については、路肩の反対側が調査区外のためわからないが、調査区北辺付近ではかった3.3mを下回らないことだけは間違いない。



Fig. 17. 075号遺構(南西より)

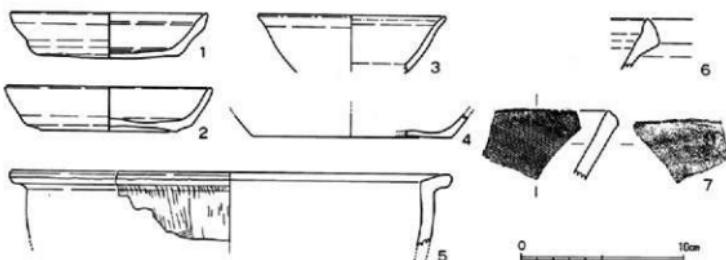


Fig. 18. 075号遺構遺物実測図(1/3)

(3) 第3面

第2面から40cmほど掘り下げた造構検出面である。標高3.8~3.9mをはかる。

柱穴・土坑・井戸・溝・道路造構などを検出した。

土坑は、大半が廐糞坑と考えられるが、一部平面長方形のものがあり、土壌墓の可能性を持つ（099号遺構、102号遺構）。しかし、人骨等の出土はなく、認定する根拠はない。

講は、道路の側溝と考えうるものが、2条検出されたが、長くのびるものではない。おそらく、本来浅く要所要所に掘られていたにとどまるのであろう。硬化した路面は良好な状況でみつかっており、道路の方向などを認定するのは容易である（17頁）。

この他、調査区南西部には、大型で扁平な礎石が検出された(Fig. 21(1))。残念ながら建物のプランを確定するには至らなかったが、道路いっぱいに面して、間口二間以上の礎石建物が立っていたのは間違いなきよう。さらに、中央の礎石では、礎石上面にへばりついで、銅錢一枚が出土した。おそらく、礎石と柱材との間に敷き込まれたものであろう。これを祭祀的行



Fig. 19. 第3面全景(北京より)(1)-1区(2)-2区

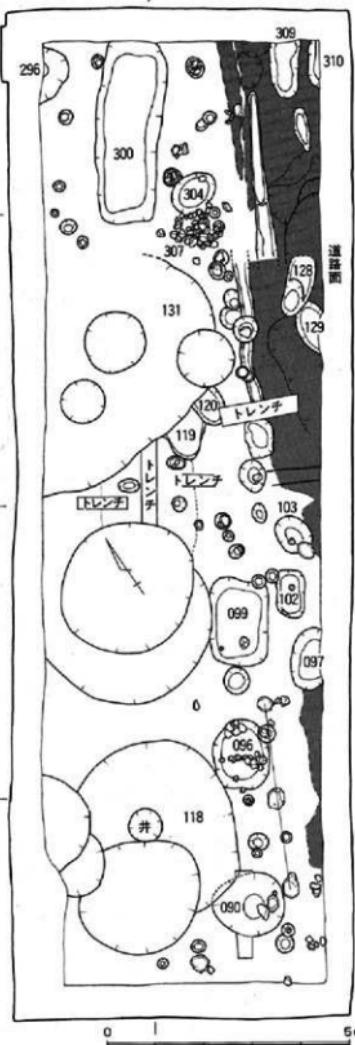


Fig. 20. 第3画遣標平面図(1/100)

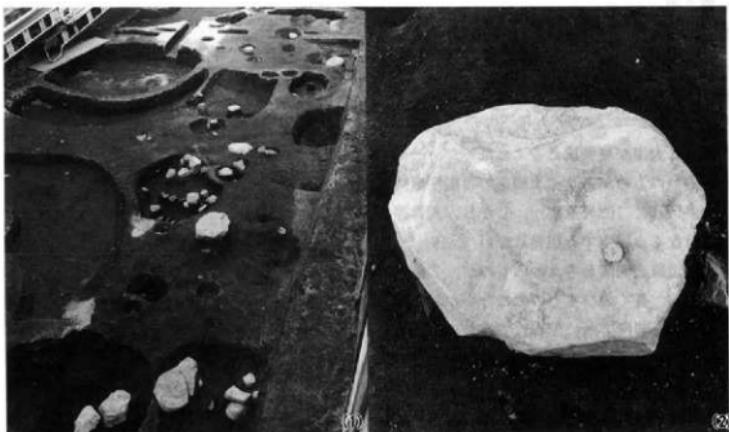


Fig. 21. 第3面礎石建物跡 (1)検出状況 (南西より) (2)礎石上銅鏡出土状況 (北西より)

為とみれば、大型の礎石を用いているという点と考えあわせて、通常の一般家屋とは考えがたい。なおかつ、これが道路に接しているとなれば、門の礎石とみるのが妥当ではあるまい。解部分の礎石を欠くことに関しては、簡易な板塀とみれば問題なかろう。すなわち、第3面道路の北に面して、門構えを持つ大型の建物区画（おそらく塔頭、33頁参照）があったものと考えたい。

なお、第3面の年代としては、14世紀代を考えている。

090号造構（土坑） Fig. 22, 23.

調査区の南西角付近で検出した、略円形の土坑である。長径1.5m、短径1.3mの卵形を呈し、検出面からの深さは、1.55mをはかる。一見井戸のように見えるが、土坑底の標高は2.31mと、湧水レベル0.5~0.8mにはほど遠く、井戸とは考えがたい。円筒形の廐棄坑であろう。14世紀代の造構と考えられる。

出土造構を、Fig. 23に示す。1~7は、土器の皿・壺である。1・2は皿で、回転糸切り、内底部をナデ調整する。1はややひずみが大きく口径7.8~8.2、器高1.2~1.4cm、2はそれぞれ7.8、1.4cmをはかる。3~7は壺である。外底を回転糸切り、6のみ内底ナデ調整がみられる。4の内面には、薄く煤が付着し、灯明皿として用いられたことを示す。8は、越州窯系青磁碗である。体部下位から外底部は、露胎となる。年代的には090号土坑には伴わず、埋土中に混ったものであろう。9は、朝鮮王朝象嵌青磁の碗である。青緑色の釉に、白土をいわゆる三島手に象嵌する。疊付は露胎で、砂が付着している。10・11は、白磁である。10は極めて薄いつくりで、内面に印花文が認められる。口唇は口ハゲとする。11も口ハゲの皿である。12は褐釉陶器の鉢である。光沢のない茶褐色の釉を施

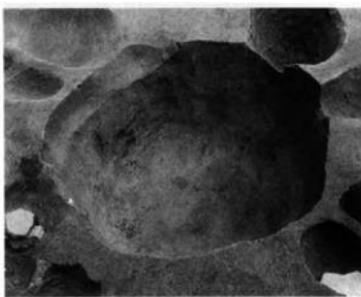


Fig. 22. 090号造構(南東より、第4面調査時)

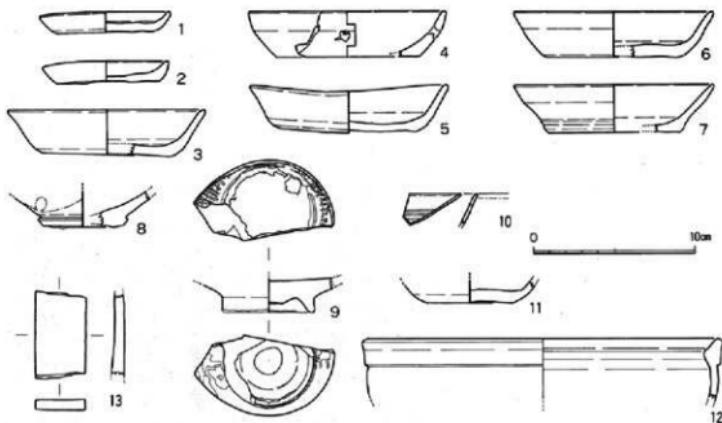


Fig. 23. 090号造構遺物実測図(1/3)

す。13は砾石である。粘板岩製で肌理が細かく、仕上砥である。この他、鍋蓮弁文の青磁碗片、鉄滓などが、出土した。

096号造構（土坑）Fig. 24. 25

小判形の土坑で、長軸1.4m、短軸1.15m、検出面からの深さ23cmをはかる。埋土中には、土師器などの遺物と共に、礫が投げこまれている。廃棄坑であろう。おおむね、14世紀代と考えられる。

出土遺物を、Fig. 25に示す。1~9は、土師器である。すべて底部は、回転糸切りする。1は皿で、口径7.6、器高1.2~1.3cmをはかる。内底をナデ調整する。2~9は環で、口径から3グループに分けることができる。2~8はそれぞれ口径11.4、11.6~11.8cmとやや小さ目のグループである。3・4・9は、口径12.0~12.2cm、5~7は、12.6~12.8cmである。器高は、すべて2.5~2.8cmの範囲内にある。7~9の内底は、ナデ調整される。8・9には、煤の付着がみられる。10・11は白磁である。11の見込みは、輪状に釉をかき取る。13・14は、青磁である。14の小鉢は、口縁を水平に折り返すもので、疊付は露胎とする。12・15・16は、陶器である。12は褐釉皿、15は綠釉鉢、16は無釉のこね鉢である。17は瓦質土器のすり鉢である。18は土師質土器の鍋である。他に瓦片・鉄滓が出土した。



Fig. 24. 096号造構(北西より)

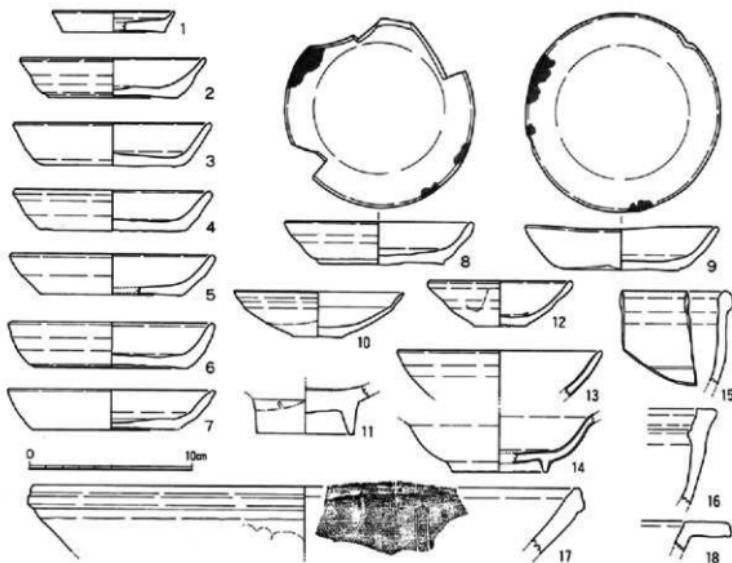


Fig. 25. 096号造構遺物実測図(1/3)

099号造構(土坑) Fig. 26, 27

第1面027号造構(近世井戸)に一部を切られた、長方形の土坑である。長辺1.7m、短辺1.2m、検出面からの深さ23cmをはかる。土坑の形状としては、墓壙の可能性も考えられるが、人骨及び副葬・供紙遺物の出土ではなく、墓とする根拠はない。出土遺物から見て、15世紀代の造構か。

出土遺物を、Fig. 27に示す。1~5は、土師器である。すべて回転糸切りする。1・2は皿で、口径7.6, 8.0cmをはかる。3~5は環で、口径10.6, 11.4, 12.2cmである。6は早島式土器碗である。口縁に模が付着する。7は、白磁皿である。外底部露胎、基筒底につくる。



Fig. 26. 099号造構(南東より)

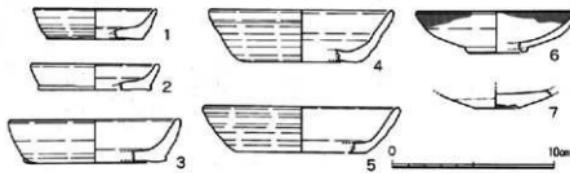


Fig. 27. 099号造構遺物実測図(1/3)

102号遺構（土坑）Fig. 28・29

隅丸長方形の土坑で、長辺1.0m、短辺0.55m、検出面からの深さ17cmをはかる。形態的には、墓壇に類似し、また埋土上位から完形の土師器が出土した点から、これを供獻土器とみれば、土壙墓の可能性がある。しかし、埋土中から獸骨も検出されており、土壙墓とするには躊躇せざるをえない。14～15世紀頃の遺構である。

出土遺物を、Fig. 29に示す。1～7は、土師器である。1・2は皿で、口径7.8、8.4cm、3～7は環で口径10.8～12.0cmをはかる。すべて内底ナテ調整は認められない。8は早島式土器碗である。見込みに重ね焼きの痕跡が、円形の変色部



Fig. 28. 102号遺構(南東より)

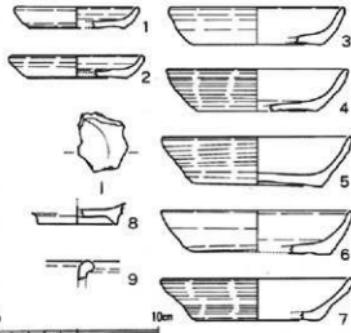


Fig. 29. 102号遺構遺物実測図(1/3)

分として残る。9は、中国製の綠釉陶器鉢である。この他、銅鏡が出土している。

103号遺構（土坑）Fig. 30.31

長径85cm、短径68cm、検出面からの深さ20cm程の、梢円形の土坑である。埋土中に獸骨等が含まれ、廐棄坑と考えられる。14世紀代の土坑であろう。

出土遺物を、Fig. 31に示す。図示したのは、土師器の环である。口径・器高は、それぞれ11.4～2.3～2.6、12.2～2.1、12.2～2.3cmをはかる。3にのみ内底ナテ調整がみられる。この他、青磁片、白磁片、鐵釘、鐵津などが出土した。

300号遺構（土坑）Fig. 32

調査区北角近くから検出した、長方形の土坑である。長辺3.7m、短辺1.2m、検出面からの深さ約30cmをはかる。板・坑などの土留めの施設を確認した訳ではないが、細長く整った形状から、水溜・汚水槽など、何らかの用途をもつた溜槽状の遺構を考えたい。14世紀前半頃の遺構であろうか。

出土遺物を、Fig. 32に示す。1～9は、土師器である。1～5は皿で口径8.0～9.0cm、6～9は環で口径11.0～13.0cmをはかる。2・4にのみ内底ナテ調整がみられる。9の身外面には、煤が付着している。10・11は、白磁である。10は口ハゲの皿である。12・13は、青磁の碗である。12の外面には、鎮蓮弁文が認められる。14・17・18は、陶器である。14は皿、17は甕、18は蓋であろう。いずれ



Fig. 30. 103号遺構(東より)

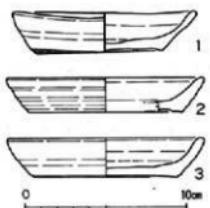


Fig. 31. 103号遺構遺物実測図(1/3)

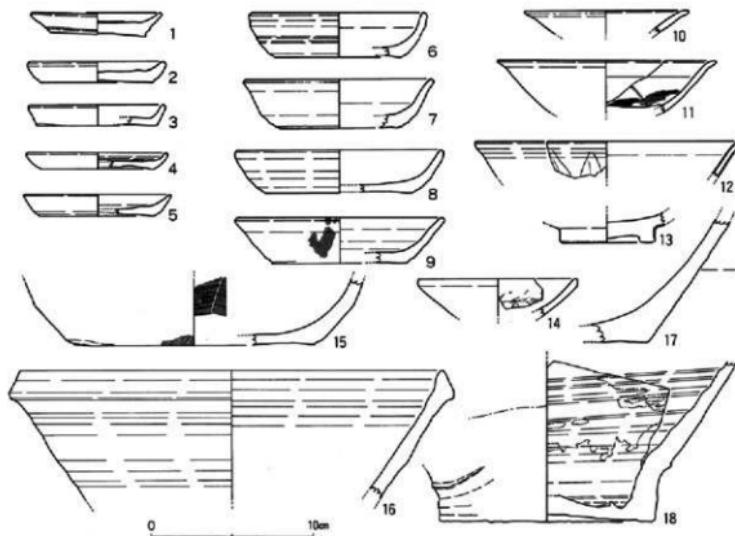


Fig. 32. 300号遺構造物実測図(1/3)

も、テリ状の薄い茶褐色を施す。15は、瓦質土器の鉢である。内底は、横ナデ調整する。16は、東播系須恵器のこね鉢である。片口部を欠く。この他、土師質土器鉢、鉄釘などが出土している。

307号遺構（集石）Fig. 33, 34

調査区北東部の中央付近から検出した集石遺構である。拳大から、25cm大の礫を、100×70cmほどの長方形の範囲に、若干掘り回めて集めたものである。あまり、面を描えた形跡ではなく、基壇状を呈したものとは考えられない。一方、道路に接した位置を占める点からみると、単なる庵石とも考えにくく、一応、意図的に集石したものとみたい。

出土遺物を、Fig. 34に示す。集石中から、礫にまじって出土したものである。1は、土師器の环である。口径11.0cm、器高2.1~2.2cmをはかる。回転糸切りで、内底ナデ調整と外底部の板状压痕は、見られない。2は、



Fig. 33. 307号遺構(北東より)

褐釉陶器の皿である。3は、青磁の皿である。平底の底部は、釉をかきとて露胎となる。龍泉窯系青磁である。4・5は、常滑陶器の甕である。同一個体であろう。この他、白磁片が出土している。

道路遺構 Fig. 35

第2面道路遺構の下部にあたる。実は、第3面を設定するにあたって、道路を最初に通した時点での生活面を目標としており、一応、道路としては最下層またはそれに近い路面を検出している。

第3面道路遺構は、硬化面の広がりとして把握した。第2面と比べると、全体として南にスライドした位置を占める。また、一部に側溝とみられる溝が検出されたが、浅く、底面の傾斜も一定ではなく、排水よりも区画を重視した小溝と考えられる。第3面道路の硬化面の路肩は、この小溝に接してとどまっている。これが当初の路面に伴った可能性を示している。2区では、硬化面の中に掘り込む形で、別の小溝が検出された。第3面道路に後出する路面に伴なう溝であろう。したがって、第3面から第2面までの道路は、まず第3面で調査した硬化面の位置に通された後、一旦南にずれ、その後、今度は大きく北にスライドして第2面道路となったという、同一地点での移動が考えられる。

なお、第3面での路面の凹凸は、第2面よりも激しいが、その原因についてはすでに述べた通りである。

第3面道路の年代については、側溝である123号遺構から出土した磁器が、鎌倉弁文青磁、口ハゲ白磁に限られていた点から、13世紀後半から14世紀前半の幅の中で考えよう。さらに、第3面の全体的な年代観が、おおむね14世紀代を主としていることから、14世紀前半におくのが、無難と言えよう。ただし、可能性だけを言うのならば、13世紀代にさかのぼる可能性もある。これについては、33頁で、もう一度ふれることにする。

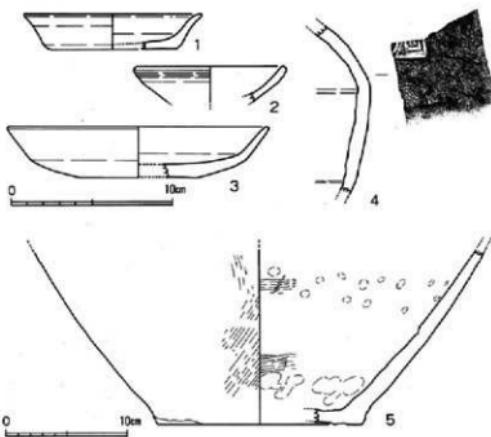


Fig. 34. 307号構造物実測図(1~3...1/3 4~5...1/4)

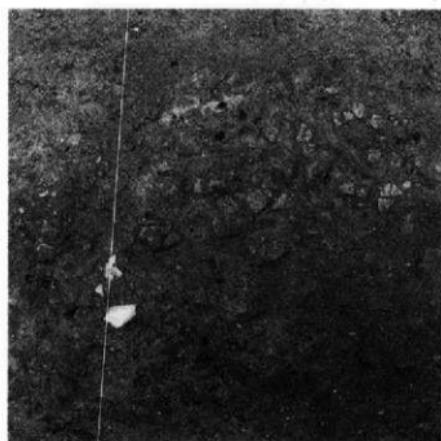


Fig. 35. 第3面道路構造路面(土器、陶磁器片による舗装)

(4) 第4面

第3面から70~80cm掘り下げた検出面で、標高3.0~3.2mをはかる。砂丘砂層上面にあたるが、この面では暗褐色土を基調にした中世の造構を調査し、その下にある暗茶褐色砂を埋土とする古代の造構には手をつけなかった。

これは、中世の造構が残ったままでは、古代の砂を埋土とした造構のプラン・切り合いか把握しにくい為である。ただし、一部明らかに検出した部分では、古代の造構も調査している。

柱穴・土坑・溝などを調査した。第4面では、道路造構はみられず、柱穴の密度は第3面以降に比べて、格段に濃くなる。また、調査区中央に、大型の区画溝208号造構と382号造構が見られる。第3面の井戸に切られる為、鍵の手に曲った単一の溝なのか、異なる溝なのか判断できないが、他の造構との切り合ひ関係を見ると全く時期が異なり、別の造構と考えられる。この他、細い溝が数条みられるが、それぞれ時期が異なる様で、区画の様相はうかがえない。

11世紀後半~13世紀前半を主とする面である。



Fig. 36. 第4面全景(北東より)(1)-1区 (2)-2区

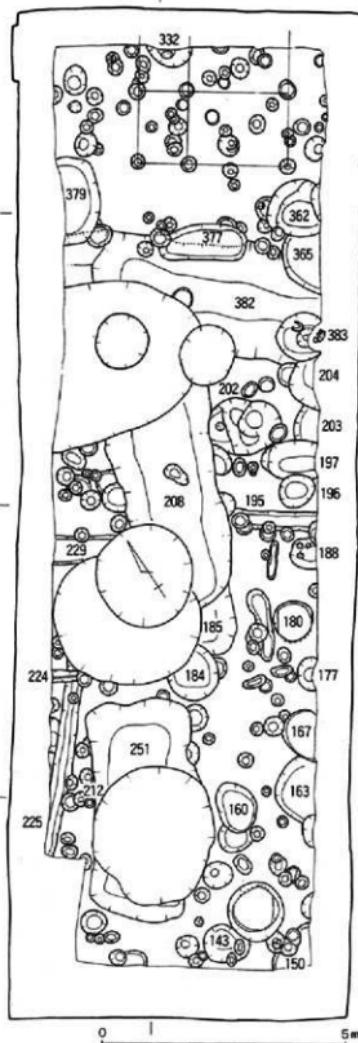


Fig. 37. 第4面造構平面図(1/100)

188号遺構（土坑）Fig. 38~40

調査区南東壁にかかる検出した土坑で、その一部しか調査できなかった。検出面からの深さは、15cm程度で、浅い廐棄坑と考える。13世紀前半。

出土遺物を、Fig. 39・40に示す。1~5は、土器である。全て回転糸切りで、内底にナデ調整、外底に板目压痕を持つ。1・2は皿で、口径・器高はそれぞれ8.2-1.1、9.4-0.9cmを有する。3~5は壺で、口径・器高はそれぞれ12.7-2.7、13.0-2.4、14.2-2.9cmと、5が3・4に比べひとまわり大型となる。6・7は、青磁の碗である。6は、片切形の沈線のみの蓮弁文、7は花弁を削って稜を作り出した鱗蓮弁文を有する。高台疊付から外底部を、露胎とする。8は、白磁鉄縫の水柱である。体部片のみで、注口・把手などは残っていない。くすんで半透明の白磁に、



Fig. 38. 188号遺構(北西より)

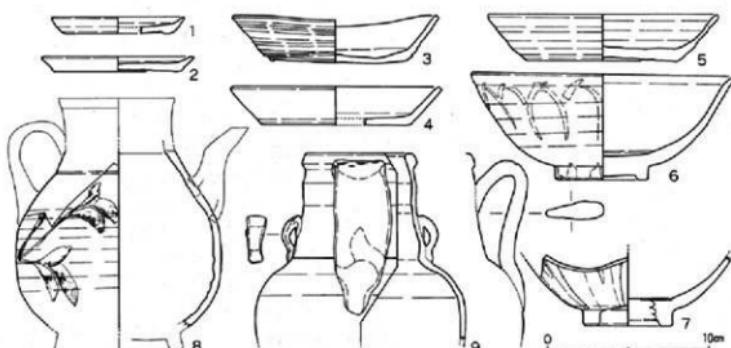


Fig. 39. 188号遺構遺物実測図(1/3)

茶褐色の鉄縫で、草文を描く。

9は茶搗釉陶器の水注である。赤茶色の肌理細かい胎土に、茶褐色の釉を施す。頭部に小さい双耳と、大振りな幅広の把手がつく。注口を欠く。この他、瓦小片が出土。

202号遺構（土坑）Fig. 41, 42

長径1.7m、短径1.2mの楕円形の土坑である。底面は凸凹で、深さ7~62cmを有する。11世紀後半の廐棄坑であろう。

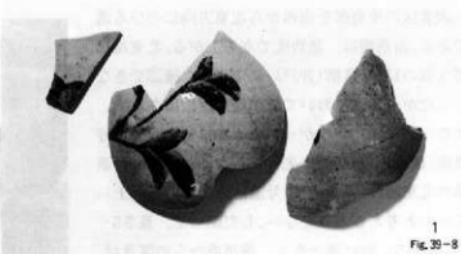


Fig. 40. 188号遺構出土遺物

出土遺物を、Fig. 42に示す。1~5は、土師器である。1~4は壺で、底部はヘラ切りする。2~4は底部を押し出して丸底にしており、内面はコテをあてて平滑に整える。4の内面には、コテの痕跡が認められる。口径・器高は、それぞれ14.8~4.4、15.4~3.2、16.0~3.7、16.3~3.7cmと、バラつきがある。5は碗である。内外面ともヘラミガキを施すが、その単位はつかみがたい。口縁部外面直下に、小さな接がつく。6~7は、瓦器の碗である。幅の広い、浅いヘラミガキを密に施す。8~11は、白磁である。8~9は皿で、外底部を露胎とする。8の見込みは、輪状に釉をかき取る。12は、黄釉陶器の盤である。体部内面に釉を施す。13は、高麗須恵器である。外面には、細かい格子叩き目が残る。14は、瓦質土器のメンコである。



Fig. 41. 202号造構(南東より)

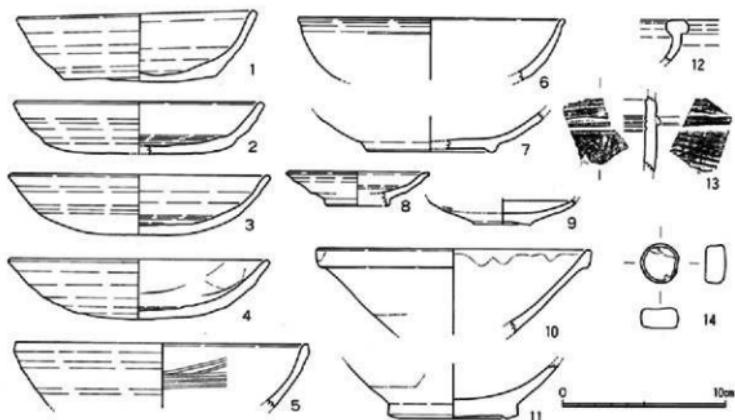


Fig. 42. 202号造構遺物実測図(1/3)

208号造構(溝) Fig. 43, 44

調査区の中央部を南西から北東方向にのびる溝である。南西端は、急角度で立ち上がる。北東端は、第3面の131号造構(井戸)に切られ、確認できなかつたが、2区においてその延長が検出されず、また一見これとつながって曲るかに見える382号造構(後述)が時期的に先行することから、208号造構の北東端は、第3面131号造構の部分で立ち上っていたと考えざるをえない。したがって、長さ5~6m程度の、短い溝となる。検出面からの深さは、70cm前後で、断面は逆台形を呈する。Fig. 43にみ



Fig. 43. 208号造構断面(南西より)

られる様に、堆積土は溝の北西方向から埋った状況を示す。13世紀前半頃に属する。

出土遺物を、Fig.44に示す。1~9・21は、土器である。1~4は皿、5~8は壺で、底部は糸切りする。皿の口径は8.8~9.0cm、器高1.1~1.3cm。壺の口径は、それぞれ10.2、12.4、13.0、14.0cmで、バラつきが大きい。9は、鉢もしくは大型の壺である。21は鍋で、煤が付着する。11~14は、白磁の碗である。15~20は陶器である。15は褐釉、16・20は黄釉、17~19は無釉で、16の口縁上面には、重ね焼きの目痕がつく。18の内面には、薄く赤色顔料が認められる。顔料の貯蔵に用いたものか。この他、龍泉窯系の鍋蓮弁文青磁碗片が出土している。

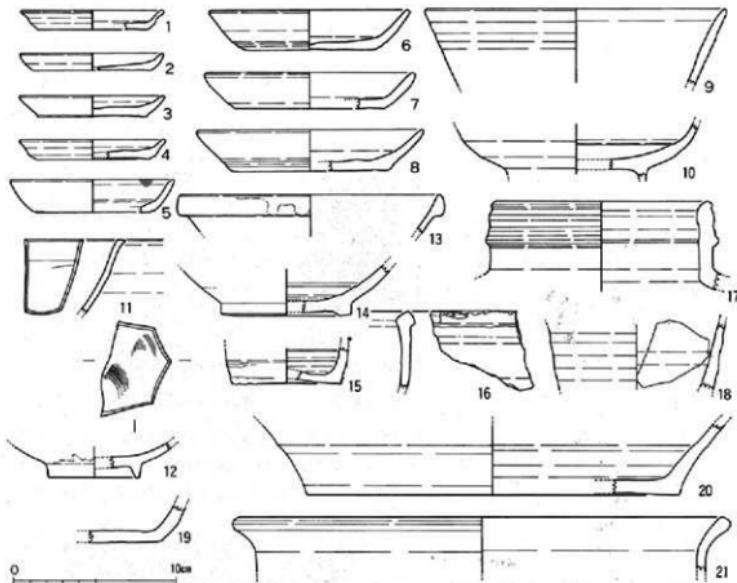


Fig. 44. 208号造構遺物実測図(1/3)

251号造構（土坑） Fig. 45~46

長方形のプランの土坑である。第2面056号造構に切られ、長辺の全長は不明だが、現存部分で長辺2.3m以上、短辺2.1m、検出面からの深さ1.0mをはかる。056号造構を挟んで反対側に、プラン的にはつながりうる造構がみられるが、その可否は判断できない。もしも同一造構とすれば、長辺は約4.5mに達する。ただし、底面のレベルが、30cm程浅く、疑問を残す。

造構の断面は箱形に近い台形を呈し、地下室状の方形竪穴土坑と考える。出土遺物は少なく、13世紀代とみられる。

出土遺物を、Fig.46に示す。1~2は、須恵器である。1



Fig. 45. 251号造構(北西より)

は、平底壺である。外底部は、ヘラ切りする。2は、高台付壺である。1・2は、251号造構の時期を示すものではない。3は、青磁である。龍泉窯系の錦蓮弁文の碗である。4は、平瓦である。須恵質に焼成される。ヘラによる切断痕をとどめる。上面には、布目と模骨を綴った網状模がネガティクス状に認められる。

332号造構(土坑) Fig. 47, 48

2区北東辺で、その一部を検出した。規模不明。廐棄坑か。12世紀前半に属する。

出土遺物を、Fig. 48に示す。1~4は土師器である。1・2は皿である。1はヘラ切り、2は糸切りで、



Fig. 47. 332号造構(北東より)

ともに内底ナデ調整、板状压痕を持つ。口径・器高は、9.0~1.2、9.2~1.2cmをはかる。3・4は壺である。底部ヘラ切り、内底ナデ調整、板状压痕を持ち、底部押し出しで丸底とする。内面は、コテをあてて平滑に整える。口径・器高は、それぞれ15.2~3.0、15.4~3.2cmをはかる。この他、白磁片、中国陶器片、鐵滓などが出土している。

362号造構(土坑) Fig. 49, 50

2区南東辺近くで検出した略円形の土坑である。径約1.2m、検出面からの深さ75cm前後をはかる。廐棄坑であろう。13世紀代と考えられる。

出土遺物を、Fig. 50に示す。1~13は、土師器である。底部は、回転糸切りである。1~6は、皿である。すべて内底ナデ調整、板状压痕を持つ。口径・器高は、1は8.5~1.2、2~5は8.8~9.2~1.1~1.2cm、6は9.8~1.2cmをはかる。7~13は、壺である。口径に対して器高が低く、器肉が薄く、体部が直線的に聞く10・13と、器肉が厚く丸味を持つ7~9・11、深目で丸味の強い12の三タイプに分類できる。10・13と12のタイプは内底ナデ調整、板状压痕を持つが、7~9・11にはみられない。口

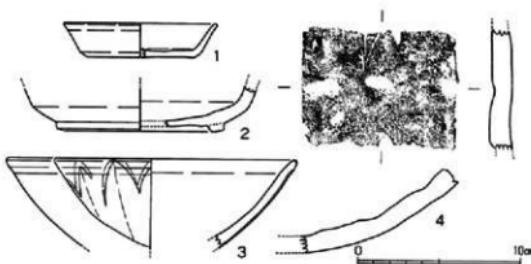


Fig. 46. 251号造構遺物実測図(1/3)

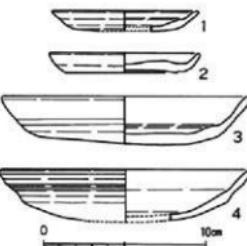


Fig. 48. 332号造構遺物実測図(1/3)



Fig. 49. 362号造構(南東より)

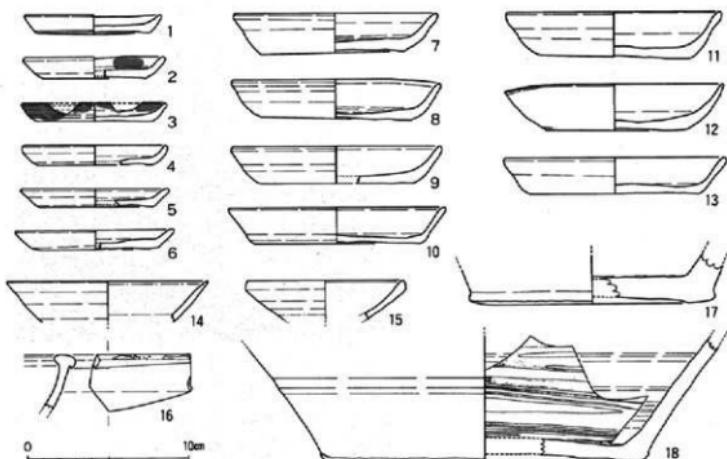


Fig. 50. 362号造構造物実測図(1/3)

径・器高は、7~9・11が12.5~13.4cm、2.3~2.8cm。10・13は、13.4~13.7cm、2.2cm。12は13.6~2.9cmをはかる。
14は、白磁の皿である。口ハゲにつくる。
15~18は、陶器である。15は褐釉の皿、16は黄釉の盤、17・18は褐釉の甕である。

362号造構(溝) Fig. 51, 52

調査区を横断する形で検出した溝である。幅2.4m、検出面からの深さは北西側で浅く33cm、途中段差をつけて深くなり、南東端では75cmをはかる。断面形状は、U字形を呈する。埋土は、濃淡の差はあるが、基本的に暗褐色の砂で、上層で若干粘り気を帯びる。

出土遺物は小片のため図示できないが、土師器・須恵器・石鍋が出土した。少量の糸切り土師皿、陶器片を混入と見れば、

9世紀初めの年代が与えられる。



Fig. 51. 362号造構土層断面(北西より)



Fig. 52. 362号造構(西より)

383号遺構（土坑）Fig. 53～55

2区南東辺で検出した、略円形の土坑である。径約1.0m、検出面からの深さは、37cm、中央部が2段掘り状に深くなり、50cmをはかる。埋土中に投棄された状態で遺物が出土しており、廃棄坑と考えられる。12世紀後半頃か。

出土遺物を、Fig. 54に示す。1～18は、土師器である。すべて、回転糸切りする。

1～15は直で、比較的底が小さく体部が開く2～4・14・15のタイプと、浅くて体部が開かないその他のタイプに二分できる。後者はさらに、小さく摘み上げた様に立ち上る体部を持つものと、横ナデに

よってさじ状に渦曲して体部が立ち上る10・11とに分けられる。法量は、口径・器高それぞれ1・5～9・12のタイプが8.1～9.2・1.0～1.5cm、10・11が9.1～9.2・1.2～1.3cm、2～4は8.2～8.4・1.0～1.3cm、14・15は9.4～9.6・1.2～1.45cmをはかる。5を除いて、内底ナデ調整、板状圧痕がみられる。



Fig. 53. 383号遺構(南西より)

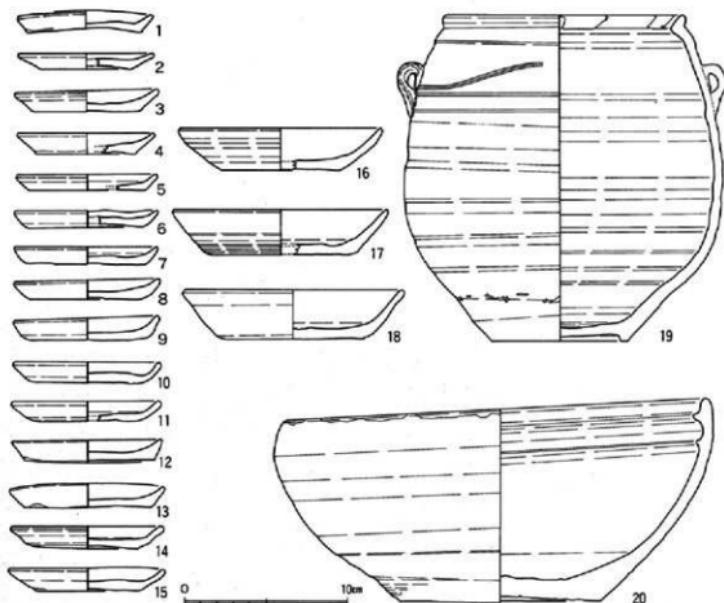


Fig. 54. 383号遺構遺物実測図(1/3)

16~18は壺である。
口径・器高は、それ
ぞれ12.6~2.6~2.8、
13.2~2.8~2.9、13
.6~13.8~2.9~3.0
で、18が16・17に比
べひとまわり大型の
感がある。また、16
・17は内底ナデ調整、
板状圧痕を持つが、
18にはみられない。

19・20は、陶器であ

る。19は、褐釉陶器の壺で、暗褐色の釉をうすく施す。口縁部上面と、体部外面下位に目痕がつく。
20は無釉のこね鉢である。暗赤褐色の粗い胎土で、堅く焼き締る。内底面は、磨かれて滑らかになっ
ている。この他、鉄釘、須恵器片が出土している。

224号造構（溝）Fig. 57-(1)

1区北西辺で検出した溝である。第1面027号造構（井戸）に切られ、全長は不明。検出した長さ
70cm、幅25cmで、検出面からの深さ約20cmの断面V字溝である。

出土遺物が小片の少量のため、時期は不明。

225号造構（溝）Fig. 56, 57-(2)

224号造構に切られる溝で、検出した長さ4.1m、幅40cm、深さ
18~26cmをはかり、底面は南西から北東に下降する。断面は、V
字に近いU字形を呈する。N-44°-E。

出土遺物をFig. 56に示す。図示したのは、須恵器のみであるが、
この他、ヘラ切りの土師器片、瓦器片が出土している。11世紀後
半、土師器・瓦器片を混入とみれば8世紀後半におかれること。



Fig. 54-19



Fig. 54-20

Fig. 55. 383号造構出土遺物

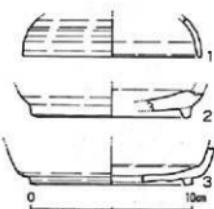


Fig. 56. 225号造構遺物実測図(1/3)



Fig. 57. 224号・225号造構 (1)-224号造構断面（南東より）

(2)-225号造構（南西より）

(5) 第5面

第4面上で、中世の遺構（埋土は暗褐色土）を調査した後、その下にばんやりと見えていた暗灰色～暗茶色砂を埋土とする遺構を調査するために、砂層を若干削り込んで設定した検出面である。したがって、第4面からは、10～20cmしか下っていない。標高にすれば、2.9～3.0mにあたる。

この検出面では、遺構埋土以外には、包含層は全くなく、自然地形である砂丘砂層の上面に達している。ここに最初の遺構が営まれた段階では、砂丘砂層上面はむき出しの海浜砂もしくは風成砂ではなく、腐食土まじりの砂が砂丘上面を覆っていた筈である。よって、第5面検出の遺構も、本来はより上位から掘り込んで営まれたものと考えられる。

柱穴・土坑・竪穴住居址などを検出した。竪穴住居址は、検出段階では埋土の境界があいまいで、プランの把握、切り合い関係など、誤りをおかしている可能性もある。今報告では、あくまでも発掘調査時の所見にしたがい、あえて、操作することはしていない。

柱穴から、掘立柱建物跡1棟を推定した。

Fig. 59の調査区南端付近に線で示したのがそれで、柱穴のひとつから土師器片、須恵器片が出土しており、8世紀中頃にあてられる。

その他、布留式系縫片も出土したが、遺構の年代としては、7～8世紀代があてられる。



Fig. 58. 2区第5面全景(北東より)

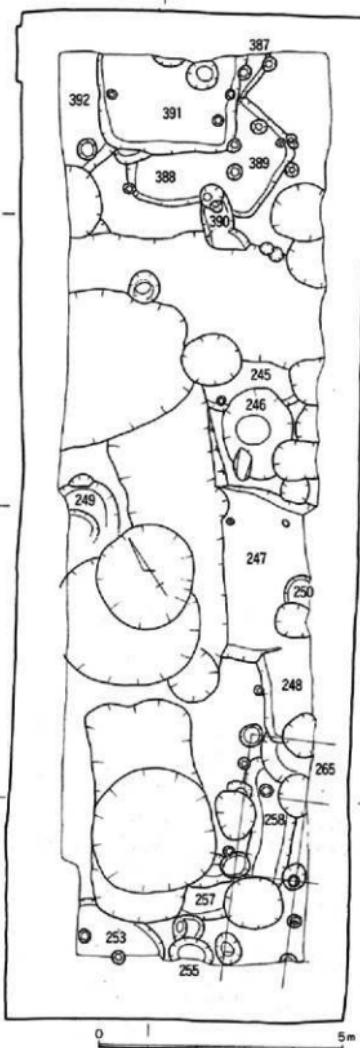


Fig. 59. 第5面遺構全体図(1/100)

A. 壁穴住居址

245号造構(壁穴住居址) Fig. 60

第4面208号造構(漆)・382号造構(漆)に切られており、住居址南西壁の一部を検出した。深さ約20cm、また、壁の中程も第4面202号造構(=246号造構、土坑)に切られるが、丁度この部分から乱された形で白色粘土ブロックが出土した。本

来の形状に復原できなかったが、竈に伴

う粘土であろう。土師器・須恵器の小片が出土したにとどまり、時期は特定できない。

247号造構(壁穴住居址) Fig. 61~64

1区中央付近で検出したもので、第4面208号造構に北西側を切られ、また南東側は調査区外に出しており、全体を知りえない。南西壁から北東壁までの幅は、約3.5m、深さ約35cmをはかる。

床面は平坦で、柱穴は見当らない。また壁溝も確認できなかった。

北東壁近くで、床面から10cm程浮いて、完形品の須恵器短頸壺と、叩き石が出土した。

8世紀後半の住居址である。

出土遺物を、Fig. 63・64に示す。1・2は、土師器である。1は碗である。外底部はヘラ削り、体

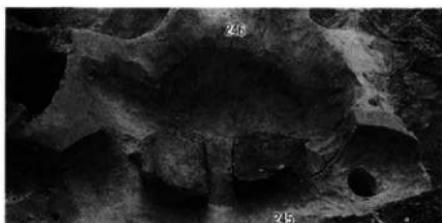


Fig. 60. 245号造構(北東より)



Fig. 61. 247号造構(南より)

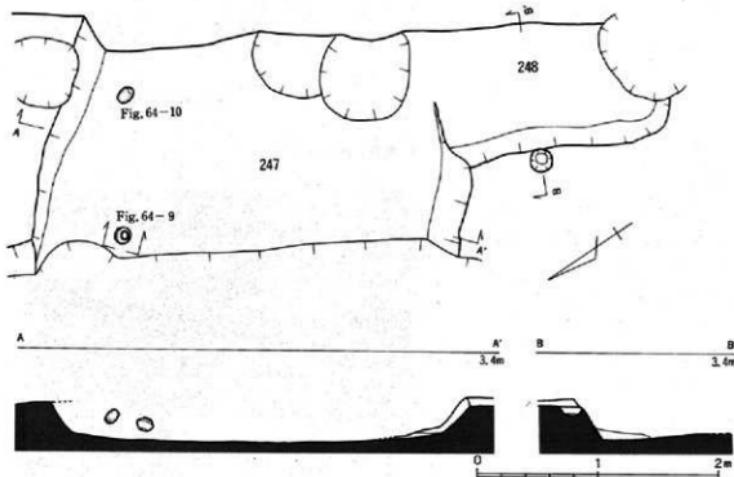


Fig. 62. 247号造構・248号造構実測図(1/40)

部外面と内面は、ヘラ磨きする。胎土は比較的良好で、赤茶色を呈する。2は、甕である。口縁部は、横ナデ調整、外面は縦方向の刷毛目調整、内面は、ヘラ削りする。3~9は、須恵器である。3・4は壺蓋で、口縁端部を小さく下方に折り返す。5~7は壺で、5は平底につくる。8は壺の口縁部である。9は、短頸壺である。肩部には、灰緑色の自然釉がうすく散る。10は、叩き石である。腹部両面と上下端に、搞打による凹みが認められる。花崗岩製。



Fig. 63. 247号造構出土遺物

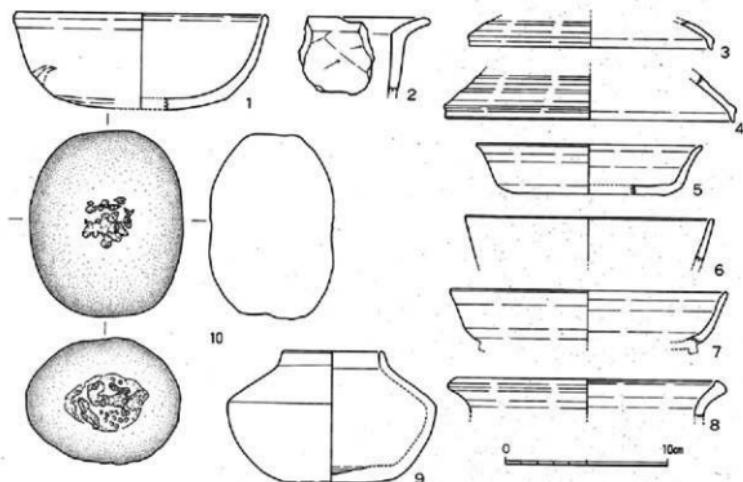


Fig. 64. 247号造構遺物実測図(1/3)

248号造構(竪穴住居址) Fig. 65. 66

247号造構と重複して検出した住居址である。247号造構に切られるものと思われるが、埋土に顯著な差はない、必ずしも確実な所見ではない。検出面からの深さは、30~35cmである。

8世紀代に属す。

出土遺物を、Fig. 66に示す。1・2は、須恵器である。3は、土師器の甕である。口縁部は横ナデ、外面は縦位の刷毛目、内面はヘラ削りする。この他、軽石が一点出土している。



Fig. 65. 248号造構(南東より)

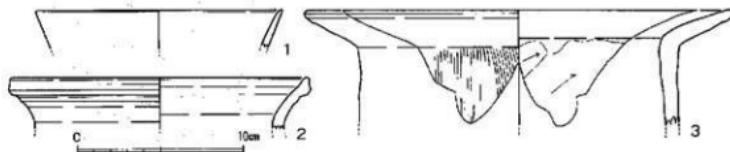


Fig. 66. 248号造構遺物実測図(1/3)

387号～389号・391号・392号

造構(竪穴住居址)Fig. 67, 68

2区で検出した、切り合った住居址群である。全体的にほんやりとプランが見えたのを、精査・検討の結果切り合ひ関係として把握し、調査したもので、個々の住居址の規模が小さく、プランそのものを認めた可能性もある。Fig. 67に示したのは、最終的な掘りあげ時の図で、地山である淡黄色砂を追って先掘した状況である。したがって、ここに明瞭にあらわれた391号造構は、間違いのないところであろう。調査時の所見で新旧関係を示すと、次の様になる。391号→392号、391号→389号→388号→387号。この内、切り合ひとプランの確認に最も迷ったのは、388号と389号であり、この両者を除けば、他の切り合ひ関係は大過ないものと考える。

391号造構は、南西壁約2.8m、南東壁、北西壁で1.6m以上、検出面からの深さ約50cmをはかる。また、他の住居址についても、検出時の壁長、検出面からの深

B B' 3.4m C C' 3.4m

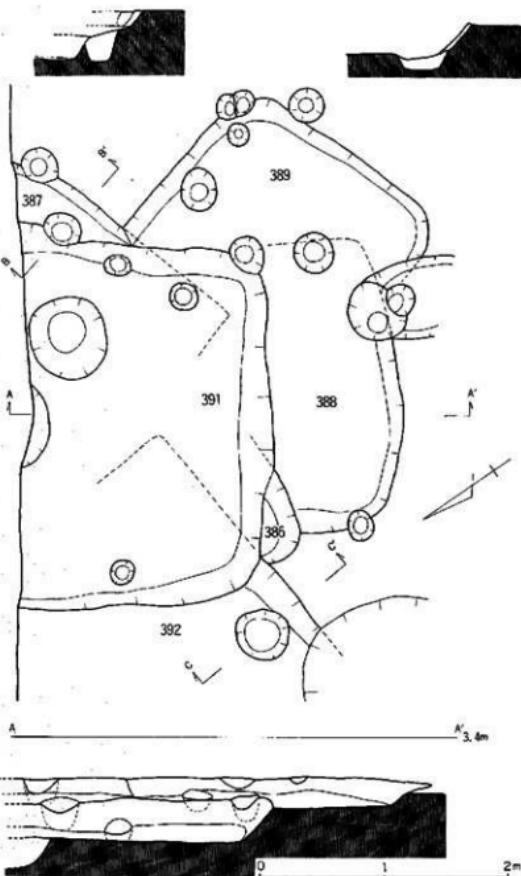


Fig. 67. 387号～389号・391号・392号造構実測図(1/40)

さを示すと、387号は長さ2.2m以上、上、深さ20cm、388号は約2.2m、15cm、389号は約2m、深さ18cm、392号遺構は2m以上、深さ30cmをはかる。

391号遺構の出土遺物を、Fig. 68に示す。1は、土師器である。脚の裾部片であろう。2~5は、須恵器である。2・4は、环、3は壺口縁、5は盤である。

出土遺物から時期比定を試みると、391号は7世紀前半、387号は8世紀前半、392号は9世紀初にあてられる。

B. 土坑

249号遺構（土坑）Fig. 69, 70

1区北東辺で検出した略円形の土坑である。推定径1.5m、二段掘り状を呈し、深さは一段目約40cm、二段目はさらに10cm程度下る。6世紀後半の廐墓坑か。

出土遺物を、Fig. 70に示す。須恵器の环と壺である。この他、土師器小片が出士している。

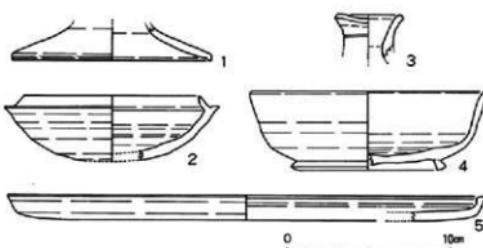


Fig. 68. 391号遺構遺物実測図(1/3)



Fig. 69. 249号遺構(南西より)

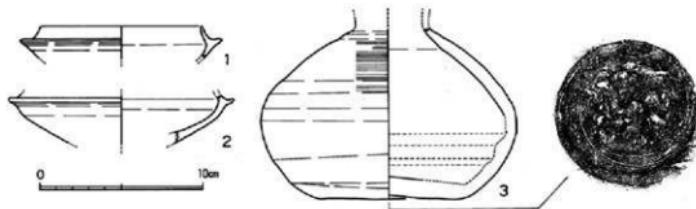


Fig. 70. 249号遺構遺物実測図(1/3)

253号遺構（土坑）Fig. 71, 72

1区南西角で検出した浅い落ち状の土坑である。大半は調査区外の為、全体の形状は不明。深さは、12~15cmをはかる。6世紀末頃に属する。

出土遺物を、Fig. 72に示す。1は、須恵器の环蓋である。天井部にヘラ記号がある。2は、土師器の壺である。磨耗しているが、わずかに縦方向の刷毛目が残っている。



Fig. 71. 253号遺構(南西より)

(6) その他の遺物 Fig.73~75、表1

次に、これまでの記述の中でふれることのできなかった造構・包含層の出土遺物の中から、重要と思われるものの一部を紹介する。1・2は、墨書き須恵器である。3・4は縄文陶器である。ヘラミガキを施す。5は、灰釉陶器である。6は白色系土師器である。口縁に煤が付く。7は、早島式土器碗である。口縁に煤付着。8は、体部が大きく開く土師器环である。周防大内氏館などで見られるタイプ。9は黒色土器A類。内面はヘラ磨き、外面は横ナデする。畿内系か。10・11は楠葉型瓦器碗である。12~15は、瀬戸・美濃系陶器である。12・13はおろし皿、14は菊花皿、15は水注であろう。16・17は備前陶器のすり鉢である。備前焼き編年図III期に該当する。18~20は、瓦質土器のルツボである。内面には、銅及び銅津がべったりと付着する。20の口縁の一部は、薄く削り込んで片口状につくる。21・22は滑石製品である。22は鏡で、外面に煤が付着する。23~27は、越州麻糸青磁である。全面

Fig.72. 253号造構遺物実測図(1/3)

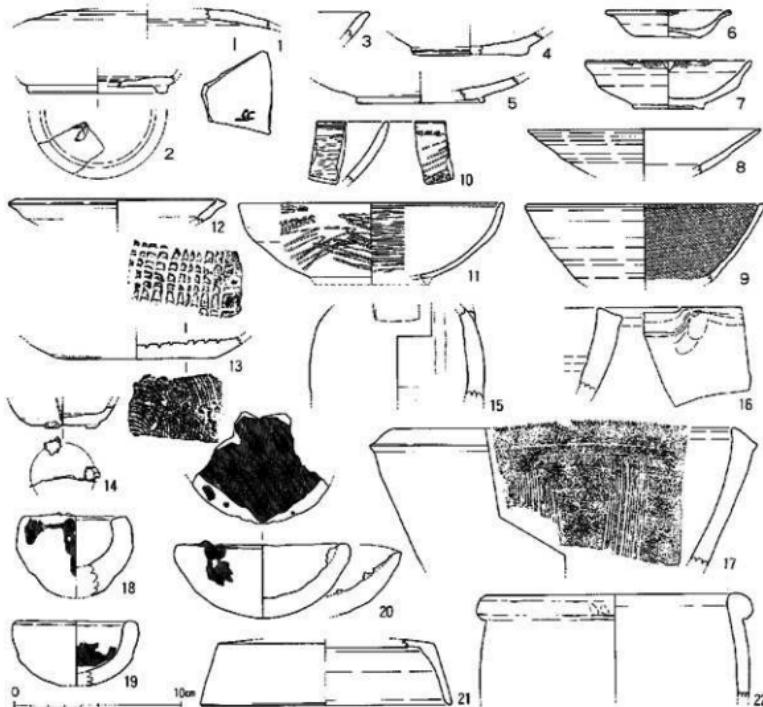
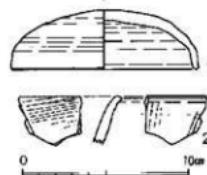


Fig.73. その他の遺物実測図1. 国產遺物(1/3)

施釉で、疊付のみ露胎となる。28・29は楊軸陶器の茶入である。胎土は極めて精良。30~36は、青白磁である。30・36は梅瓶の胴部片である。この他梅瓶片が7片出土している。37~40は、墨書磁器である。37は白磁碗で「柳綱」38は白磁碗で「大」、39は青磁碗で「大口」、40は白磁碗で「黄綱」と記す。41は、青磁の双層碗である。上層の底部にも施釉されている。

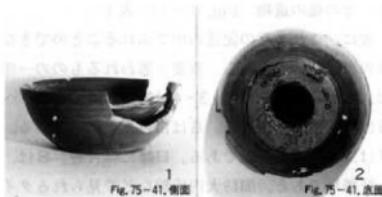


Fig. 74. 青磁双層碗

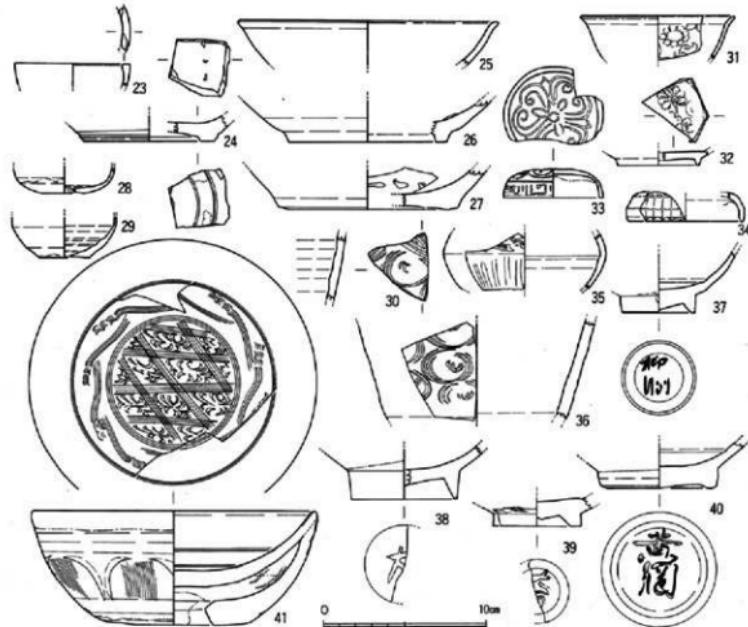


Fig. 75. その他の遺物実測図2. 輸入陶磁器(1/3)

表1. 銅錢一覧表

銅錢出土遺構一覧				
検出面	遺構番号	錢貨名	点数	備考
1	001	解説不能	1	
1	025・026	寛永通寶	1	
1	037	祥□口寶	1	
2	055	解説不能	3	
2	062	解説不能	1	
2	287	解説不能	5	
2	包含層	解説不能	2	
2下	包含層	解説不能	1	
3	102	解説不能	1	
5枚帰				

銅錢出土遺構一覧				
検出面	遺構番号	錢貨名	点数	備考
3	礎石上	太平通寶	1	
3下	包含層	皇宋通寶	1	
出土銅錢一覧				
錢貨名	時代	初鋤年	点数	
太平通寶	北宋	太平興國元年	976年	1
皇宋通寶	北宋	寶元元年	1037年	1
寛永通寶	江戸	寛永13年	1636年	15
解説不能				
総計				18

第三章　まとめ

以上、簡略ながら博多遺跡群第74次調査の概略を述べてきた。最後に本調査の要点をまとめ、今後の調査・研究の資としたい。

1. 本調査地点における遺構の出現は、6世紀後半である。8世紀には、数棟の堅穴住居跡が営まれ、集落の一端を占めていたものと思われるが、墨書き器も出土しており、注意を要する。
2. 11世紀後半以降、高密度な遺構が営まる。
3. 14世紀前半に道路が通され、16世紀末まで整地によるかさ上げを繰り返しながら、維持した。
4. 14世紀代には、道路に面して、大型の建物区画があったと考えられる。
5. 15~16世紀には、道路に面して掘立柱建物跡がまばらに存在した。

本調査地点の性格を考える上で重要なのは、ここが少なくとも16世紀中頃には聖福寺の寺内町に含まれていたと言う点である（2頁）。それを示す「聖福寺古図」「安山信家譜」によれば、寺内町は、聖福寺の西北に大きく展開し、「中小路」「普賢堂」「魚町」などの小路に面して間口1~2間程の町屋が立ち並んでいた様子がうかがわれる。これについては、鏡山猛氏や宮本雅明氏によって考察・復元案が示されている。

本調査地点の道路は、この聖福寺寺内町を通る道路である概然性が非常に高い。博多遺跡群の道路遺構についてはかつてまとめたことがあるのでここでは省略するが、その後平成6年度の第84次調査において、本調査地点の道路に平行する道路筋が、さらに北側から検出された（未報告）。これと聖福寺の北西を限る築地遺構（第76次調査、「博多40」）をあわせて、聖福寺寺内町を通る北東~南西方向の道路筋はおおむね確認できたことになる。これらについては、いずれ機会を改めて考察することとして、その成果だけ拾っておくと、第84次調査では15世紀代までは道路ではなく、16世紀に入って後、通されたものである。第76次調査の築地は、14世紀に築かれたが、15世紀にはすでに崩れて塀に変わり、16世紀には掘立柱建物跡が数棟見られる。

ところで、聖福寺には盛時には子院が38もあったという。これらは、現在はほとんど残らず、その場所さえ伝わっていないのだが、一体この様な多数の塔頭はどこにあったのだろうか。聖福寺の北東は、かつては低地であったと推測され、多くの塔頭を想定するのは困難である。南東は、ほどなく承天寺の寺域となり、ここも数字を除けば無理である。南西側には聖福寺の前面を通って中世博多のメインストリートが通り、その向かい側には奥堂式屋敷をはじめ商人・町人の家並みが広がっていたと見られた。すると、多数の塔頭が展開できたのは、北西側、16世紀に寺内町があったその部分しか考えられない。そうすると、本調査の第3面で検出した、礎石の門を構えた建物区画は、塔頭の一つであった可能性が高いということになる。

すでに紙数がつきたので簡単にまとめる、聖福寺は鎌倉時代、次第に北西方向に塔頭を増やして拡大し14世紀には博多浜いっぱいに達してここに築地をもうけた。しかし、15世紀には築地の荒廃・塔頭域への町人の進出が始まり、相次ぐ戦乱による荒廃が、塔頭の寺内町化に拍車をかけ、16世紀中頃の「安山信家譜」に見られる景観を作り上げたものと考えられる。

大庭康時 1994 「博多ー中世の商業都市」 鎌倉考古学研究所編「中世都市鎌倉を掘る」

日本エディタースクール出版部

福岡市教育委員会 1993 「博多40-博多遺跡群第76次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第332集

宮本雅明 1991 「中世後期博多聖福寺境内の都市空間構成」『建築史学』17

鏡山猛 1971, 1972 「中世町割りと条防造制（上・下）」『史淵』105, 106合輯, 109輯 九州大学文学部



博多46

—博多遺跡群第74次発掘調査概報—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第395集

1995年(平成7年)3月31日発行

編集・発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 玉川印刷所

福岡市中央区清川3丁目18番11号